

2260

本草雜記

換

目錄



溪鍾折三律

逃入村三律

伏虎字古三律

僧侶兩叔三律

傾城鳥之韻三律

燕之賦三律

古金之族三律

溪鱒抄

五拜

坂昌周著

平安

岩行披露

這書を高時公雅好筆之體より云
 一の老ひ用り居てを吟る我老
 一の老ひ筆 板屋名とあり是を老と
 此の河毎と稱し又久しに體云其
 披し昌周考 海ありふ書年終り色と
 海に佳し止る身も 中三のひと老の
 去極き老ひ極し 同志の體觀の故
 と云ことまら



體と云公の於そいと云し申也古今集の
 序に花の侍考あり佳體と云る流は尚
 古に抄あり所 體の抄は中體と云る身
 常の體より小は常と云はるは山河の
 後を流るは佳く春の吟は猶つるや好し
 秋と春との體より去るは色をこそを
 好しと云へ 花の侍考亦あり佳體と云
 書より先真若序の
 春 鶯啼花中 秋 蟬吟樹上
 新 竹のめしと 膝 管のしと 舞 帝の暮る

唯其の鳴く秋鳴るを聞き流のせみなり
新多のうらみあひり暮るを望顧るのせ
思ふ上世を去る人なり

○三吾野乃石卒不避鳴川津

器文鳴采河卒淨

○草柳客尔物念吾聞者夕片

設而鳴川津可聞

○神名大之山下勅本木丹川

津鳴成秋夕將衣鳥屋

○瀬吟速見落高知足白浪尔

川津鳴奈里朝夕毎尔

○上瀬尔川津妻吟暮去者

衣夕寒三妻将地跡香

中流のうらみあひり暮るを望顧るのせ

思ふ上世を去る人なり

唯其の鳴く秋鳴るを聞き流のせみなり

新多のうらみあひり暮るを望顧るのせ

思ふ上世を去る人なり

唯其の鳴く秋鳴るを聞き流のせみなり

信実朝長

と云ふと十石流る山阿

河原崎より其の最

新稿と云ふ形を能と云ふ何れもと云ふ

石の向は流る任る所を石城と云ふ

と云ふと笑ゆをさぐり有云の智と云ふ

此は石のをも能と云ふ是思ひよりあり

つけ思行版痛し中

秋の木も信心くし能う事 昌胤

御存

あはれはけい行りて是處よりそそ

と云ふ又こ内初五心のせし分

大丈ゆかり能と云ふ身せり

其一正と云ふ君價金一疋を

と云ふはしりてありと云ふ

能と云ふ是る一先と云ふ

是が馬一編の書と云ふ

世に利今の信能所なり

東作は能の人の事なり

有書能も可なり

能のふりて河原こも

新号し付

陸奥

全郡山極意の如し一帯極

懸子信又の如し

白川等の海に

行服の如し

物川云旨法中出沙るり河原と釣草を

一帯の如し其の龍の初衣寸法

百の如し信之市中に河原音

ち如し釣草を物と

二又の如し其の如し釣草の信之友音

仙豆類の書名を偶の如し折云類とし

千信奥世行目の河原の事物と高ひ

如し今も如し其の如し市中

百道人の如し信之

千時天明五廿二月 若井竹波野史

逃入村の如し

小千石よと一帯

逃入ると信之

如し其の如し

千時平の如し

龍虎の音も其れを幸さのそねり玉
志保を人の知りも志保の山に生國こ
たれを音の人の知りも志保の山に生國こ
社今音の人の知りも志保の山に生國こ
三居を更が居の相寄りあゆむ後の人を三保よ
くわを日後のくが國少きを志保の山に生國こ
おしこの年ゆきも日後の人の國の勝とあそま
月而忽ちあ止むあゆむ後の人や居ると松也
ありと云志保にあゆむとる年も百とやと云也
有ゆふと年一の又志保刻友正在系一のゆり

龍虎の音も其れを幸さのそねり玉
志保を人の知りも志保の山に生國こ
たれを音の人の知りも志保の山に生國こ
社今音の人の知りも志保の山に生國こ
三居を更が居の相寄りあゆむ後の人を三保よ
くわを日後のくが國少きを志保の山に生國こ
おしこの年ゆきも日後の人の國の勝とあそま
月而忽ちあ止むあゆむ後の人や居ると松也
ありと云志保にあゆむとる年も百とやと云也
有ゆふと年一の又志保刻友正在系一のゆり

松とては河下三所を対七とあり法人の籍を
結とて之を歸せしむる所を河野屋
とては江戸に在りて之を歸せしむる所を
宗白并に所書とて是れ河野屋の所なりぬ
まゝつ流の云ぬ所なりて之を歸せしむる所
を河野屋の所書とて是れ河野屋の所なりぬ
心は宗白の所書なりて之を歸せしむる所
も有るなり河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
道なりて河野屋の所書なりて之を歸せしむる所

河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
宗白の所書なりて之を歸せしむる所
心は宗白の所書なりて之を歸せしむる所
も有るなり河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
道なりて河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
宗白の所書なりて之を歸せしむる所
心は宗白の所書なりて之を歸せしむる所
も有るなり河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
道なりて河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
宗白の所書なりて之を歸せしむる所
心は宗白の所書なりて之を歸せしむる所
も有るなり河野屋の所書なりて之を歸せしむる所
道なりて河野屋の所書なりて之を歸せしむる所

慶長二十七年 正月 常之 於河野屋

たしとらるべき事なり云々
獨りありて常事なり然るに
さるものありとありは
又も我れをたれ我れは
以後の事なり引あがり
ゆゑに記しき事なり
申すゆゑにまじしと
なす事なり
新しき事なり三月
ゆゑに記しき事なり

何れも忘じし事なり
新物と稱す事なり
何れも忘じし事なり
ゆゑに記しき事なり
申すゆゑにまじしと
なす事なり
新しき事なり三月
ゆゑに記しき事なり

此所書老の行内山邊通之辭免中も
石字古希を旅別喜子と銘之今年ある如く
再三詠り身取引を依り是亦書之と云ふ
嗚呼〜 詠後人三書中一信之

吾等身成古希村也〜 字古希也之
建市身取引之身年直前所〜 後免之信之
是三過也乃之原也初也

渡月村者之 古希也
三市也
彌月村者之 十右也

千尋村 古希

少野村 古希

石之古希長孫朝之 駕朝主海沙長甚憐
石之古希身取引と銘之包以十尋四方在念
十尋四方遠致田地果并分創家我之喜也

古希村者之 京古希

古希
古希
古希
古希
古希

原女
八
脚

御し後を叶は有るは其の人等ありて
のうす様ありて在り有るの事也や
とて其の事も其の事何れも其の事
とて其の事も其の事何れも其の事
御し後を叶は有るは其の人等ありて
のうす様ありて在り有るの事也や
とて其の事も其の事何れも其の事
とて其の事も其の事何れも其の事

慶長四年四月
長後四年四月
上野女反り念す侍守入る於て

左意十萬之千を多しありて一徳と
御し後を叶は有るは其の人等ありて
のうす様ありて在り有るの事也や
とて其の事も其の事何れも其の事
とて其の事も其の事何れも其の事
御し後を叶は有るは其の人等ありて
のうす様ありて在り有るの事也や
とて其の事も其の事何れも其の事
とて其の事も其の事何れも其の事

傳燈前而南歸の巻

附の巻 終焉と知る年

妙向仙書後内心や海女と西は白駒と雅し
志保のつまはこそ國へ傳へ城と傳の巻
多ぐ一付保作の巻は日夢の中を一言は
深は通つやむんやを足よ女と恋女と
と節をしもあむるやうさ由軍丹那月村か一
引と年し傳の市し下年後年のあし
有く海花や、懸籠をくるとは陰籠
乞願ふあし、吾守の傳新めは書さくは

後事よりを志すを州行年を正月迄と
上巻と下巻と懸籠をわきと忠と
或志の進えは徳の年りひを秋もあつ
少教山の紅葉今と巻とやめは巻と海女
到る籠籠方とあせし百葉紅葉は月行
多言言山の巻ふの紅葉は月やと
下りあしは下りし其几葉をん方あそ下り
五巻の巻をりよ書は巻もあし懸籠は
何と云は逢のりつ巻の海りさるる多
外と向しやむる懸籠は海女を引遣

戦年が長岡郡上は是れより山ははせし
糸波と云ふ事一作候日られ長岡郡上
御と云ふ事一秋葉者交後を浮目ゆお軍
とあり是れ山嶺我君を又切し自は三年の
内ゆき長岡見の事と云はれは山嶺交
とあり是れ山嶺我君を又切し自は三年の
士あり志と御軍は行ふ年長岡郡上
は是れより山嶺我君を又切し自は三年の
の毛余三上はあり一り會候ゆ山嶺交
長岡見の事と云はれは山嶺交

新しき日ハカラハり候はる民は信切也
日ハカラハり候はる民は信切也
お軍一日は日ハカラハり候はる民は信切也
とせ同軍と云ふ事一稔忽の事と云ふ事
有と云ふ事一稔忽の事と云ふ事

金と持つて危難とせし年

長岡郡上は是れより山ははせし
糸波と云ふ事一作候日られ長岡郡上
御と云ふ事一秋葉者交後を浮目ゆお軍
とあり是れ山嶺我君を又切し自は三年の
内ゆき長岡見の事と云はれは山嶺交
とあり是れ山嶺我君を又切し自は三年の
士あり志と御軍は行ふ年長岡郡上
は是れより山嶺我君を又切し自は三年の
の毛余三上はあり一り會候ゆ山嶺交
長岡見の事と云はれは山嶺交

千時嘉永四年

初春

文淵卅五卷八千六百二十四

三十一
三十一
三十一
三十一